

生産性向上のニューノーマル! 感染症を乗り越え挑んだ 施策の数々が現場を一つに 練馬光が丘病院改築工事



創意工夫に富む現場の取組みやマネジメントの最前線を追う!!



躯体が完成し、外装工事が進行中の練馬光が丘病院。広い現場では、タブレットでの情報共有が欠かせない。

工事概要	
工事名	練馬光が丘病院改築工事
工事場所	東京都練馬区光が丘2-5-1
発注者	(公社)地域医療振興協会
設計・監理者	久米設計・環境デザイン研究所 共同企業体
施工者	(株)フジタ 東京支店
用途	病院(457床)
階数	地下なし、地上7階、塔屋1階
構造	RC造(一部SRC造)
敷地面積	14,998.36㎡
建築面積	8,166.59㎡
法定床面積	36,839.89㎡
最高高さ	29.50m
全工期	2020年4月1日～2022年7月29日



完成予想パース (画像提供: (株)フジタ)

二〇二〇年の新型コロナウイルス感染拡大から約二年が経過、当時の混乱のなかで着工した案件が、徐々に竣工を迎えようとしている。感染対策がそのままDX推進へとつながり、生産性向上の最前線となった事例を紹介する。

コロナ禍での着工となった 地域医療の拠点

東京都練馬区にある、都内有数の大規模団地「光が丘パークタウン」。その中心部にある「練馬光が丘病院」は、同区の基幹病院としての役割を担ってきたが、一九八六年の開設から年月を経て老朽化が進行、施設の狭隘化も目立つため、地域医療強化の一環として建替えが決定した。

現病院から二〇〇mほど離れたところにある現場の敷地は、閉校した中学校の跡地。昨年末に躯体が上棟し、内装・外装などの仕上げ工事を行っている段階だ。

施工を手掛ける(株)フジタ・練馬光が丘病院改築作業所の後藤篤彦所長に、現場の概要をお聞きした。「工事名称は『改築』となつてま

開催できるのか。これまでの方法が全く通用しないなかで計画を立てなければならず、大変でした」

五月の地鎮祭後に建てた現場事務所は、職員同士の席の間隔を空け、会議室を広げるなどしたため、通常の一・五倍ほどの大きさになったという。

「やはり病院を建てている以上、事故や災害はもちろん、絶対にクラスタの発生源になつてはならない、という想いは強く持つてましたね」
ゆとりをもつてつくられた所内には、ユニークな部屋も設けられた。「出勤した職員が、電話や来客対応に煩わされず、集中して自分の

すが、実質的には新築です。完成後は、現在の病院の機能をこちらに移転して今年十月に開院予定なので、七月の引き渡しに向けて大詰めといったところですね」

着工が二〇二〇年五月ということは、新型コロナウイルスによる影響が大きかったのでは？

「このプロジェクトが決まったのが二〇二〇年三月で、まさに感染拡大が始まった時期。それこそ仮設事務所をどうつくるか、工事をどう進めたらいいか、住民説明会は



株式会社フジタ
東京支店建築工務部
練馬光が丘病院改築作業所
所長

後藤 篤彦 Atsuhiko Goto

仕事に没頭するための「リモートワーク室」です。部屋自体は何の変哲もない事務室ですが、実はこれがけっこう効果的だったと思っています」

自席で様々な雑務に対応しながらの仕事が非効率的なのは、誰もがわかってのこと。しかし、実際に執務空間を離れることは難しい。「集中したい時は、席を離れて別の場所でやればいい。それで半日かかっていた仕事が二時間で終わるなら、残業も減るし休日も取れるようになるわけですから。職員にそのやり方が浸透したのは大きかったですね」

入退場ゲートにある検温システム。数秒立つだけで、体温測定と所属会社・氏名の登録、出退勤時間を管理。グリーンサイト・CCUSとも連動しているほか、最終退出時に現場内に残っている人がいるかどうかの確認もできる。



事務所内にある「リモートワーク室」。短時間で集中したい時や、Zoom・Teamsなどのリモート会議にも有用だ。



図面・書類を一元管理し、タブレットなどで手軽に確認できるアプリ「CheX(チェックロス)」。その場にいなくてもチェックできるため、移動時間のムダがなくなる。





上／正面から見た病院。完成すれば、病床数457の拠点病院となる。
下／仮囲いには、医療従事者への感謝のメッセージを掲示している。

「協力会社の皆さんには、最先端の現場で働いている、地域の皆さんに期待される建物をつくっているのだ、ということ強調して作業に取り組んでもらいました。職人としてのプライドを刺激することで、安全・品質に関する『常



株式会社フジタ
東京支店建築工事事務
練馬光が丘病院改築作業所
副所長

川村 友也 Tomoya Kawamura

見ることが重視されていましたが、コロナ禍で非接触やリモートが推奨されたのをきっかけに、こういったツールの利便性が広まった感があります」

効率化が進んだ一方で、顔を合わせる機会が減りがちな点に配慮し、全体の一体感創出、士気向上にも心を砕いたという。

「近年、建設業界以外でも様々なツールやシステムの進化が加速していますよね。我々もそういう便利な

識』のレベルが上がる。そういう狙いがありました」

最後に、後藤所長にこの現場で目指したことについて語っていただいた。



外部足場に掲げられた巨大な集合写真。最盛期で600名に上った技能者の意識統一に一役買った。

失敗を恐れずチャレンジする 心意気が新常識を創造する

運用が進んだ デジタルツールの 生産性も士気も向上

コロナ禍を受けて導入したシステムが進化し、協力会社の労働環境改善に寄与したのが入退場ゲートだ。工務担当で元方安全衛生管理者の五十嵐靖副所長に詳細を伺った。

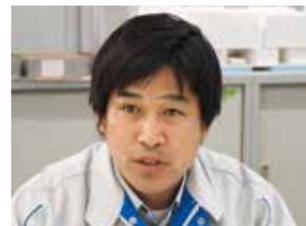
「最初はとにかく入ってくる全員を検温しなきゃ、ということ。一人ひとり非接触型の体温計で測っていたのですが、そのうち無人で測定と顔認証が同時にできる機器が出回り始めたので取り入れられました。それがどんどん発展していった形です」

現場に出入りする技能者の顔写真を登録しておけば、検温と同時に顔認証で所属会社・氏名を認識し、出勤時間も記録。更にグリーンサイトやCCUSとも連動して個々の就業履歴も残る。カードを

リーダーにかざす手間を省き、協力会社にも好評だ。

施工管理におけるデジタル化については、工事担当の川村友也副所長に代表的なツールを紹介いただいた。

「双方向のビデオ通話で、今見ているものを離れた相手と共有できる『CONNECT』、搬出入やクレーンの作業予定を元請と協力会社それぞれで調整できる『アレンジメントシステム』など、当社が以前から開発に注力してきたITツールを積極的に取り入れられました。これまでは現場に行って実際に



株式会社フジタ
東京支店建築工事事務
練馬光が丘病院改築作業所
副所長

五十嵐 靖 Yasushi Igarashi

ものはどんどん使ってみて、新しいことにチャレンジしていく。ダメならダメでそれがノウハウになるの

で、二の足を踏まず何でもやってみる、という姿勢が生産性向上につながっていくのではないのでしょうか」

Webサイト「WorkStyle Lab」で動く現場を見よう!!

建設業界の働き方改革を伝えるサイト「WorkStyle Lab」では、「現場イノベーション」と連動したコンテンツを随時掲載中です。取材先の更に詳しい取組みやこぼれ話など、誌面に載せきれなかった内容を動画などで紹介します。所長さんなどの想いを生の声で、また実際の工事現場の様子を臨場感あふれる動画でぜひご覧ください。たくさんのアクセスをお待ちしています。



WorkStyle Lab
<https://www.nikkenren.com/2days/workstylelab/>